

第百八十五回

史跡めぐり 騎西町地区

龍興寺

多賀谷神社

大福寺

騎西町の野与党諸氏の拠点

金剛院板碑

私市城址

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

第百八十五回 史跡めぐり案内 (騎西町地区)

とき 平成3年 9月22日 (日)

集合 越谷駅東口前 午前8時20分 8時44分発 伊勢崎行 準急

コース 越谷駅 | 加須駅 | タクシー | 龍興寺 | 成就院 | 稲荷神社 | 多賀谷神社 |

大福寺 | . . . | 昼食 | 浄楽寺 | 善心寺 | 実乗寺 | 大英寺 | 金剛院

私市城址物見台跡 帰路 | バス . . . | 加須駅 | 越谷駅 | . 解散

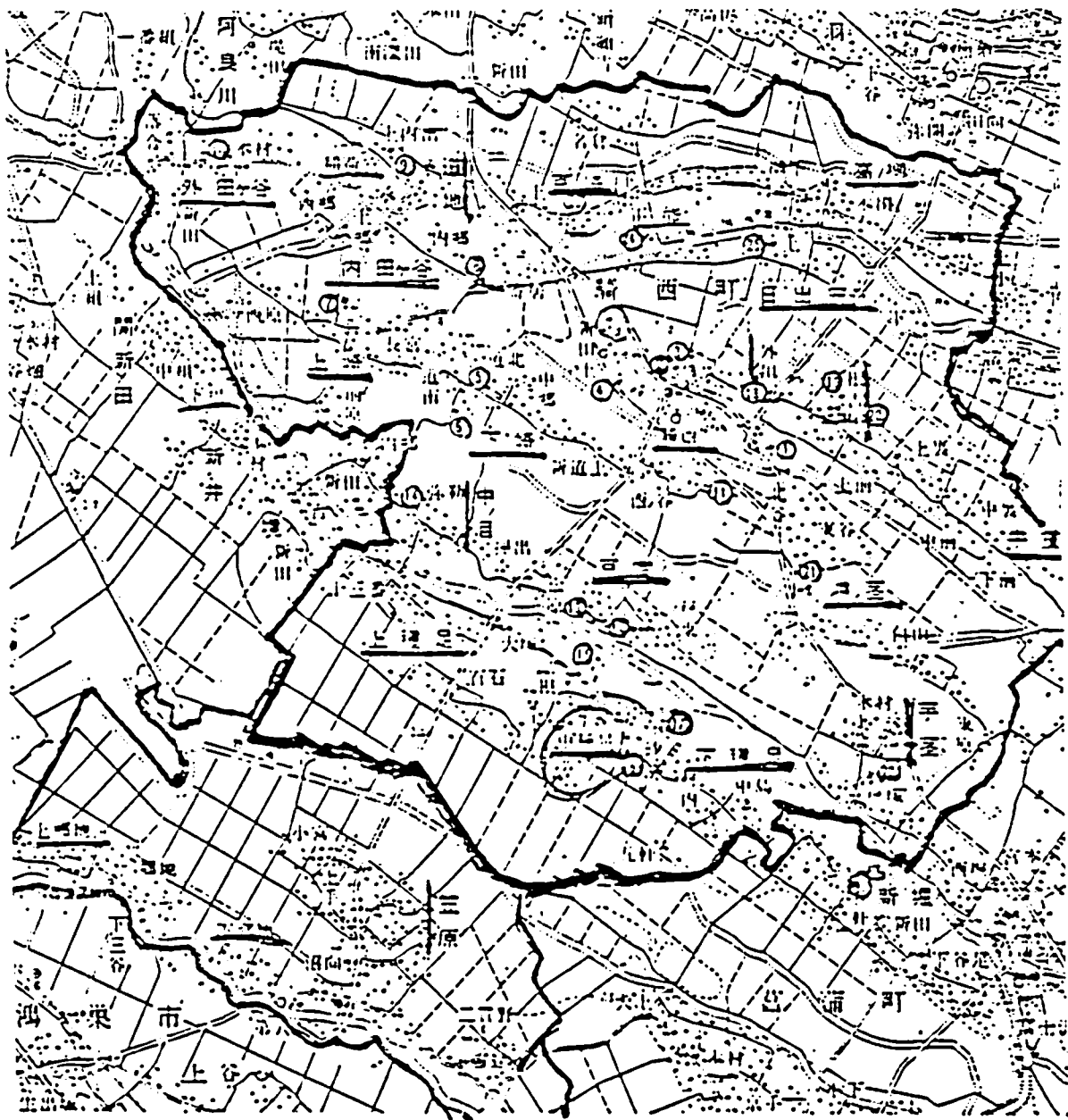
案内人 山崎善司 理事

会費 2,200円也、但し、交通費(タクシー代含む)資料代 他。

その他 昼食は、各自・食堂にて。

申込先 葉書に住所・氏名・性別・電話番号を明記の上、下期へ19日迄に申込み下さい。

越谷市宮本町3-1117-18
谷岡隆夫方 越谷市郷土研究会
☎ 6217527



馬西町

騎西町の野与党諸氏の拠点

野与党

野与党の播擧した地域は、武蔵国騎西郡と云われた、埼玉県東部地域で北は、埼玉郡の内、騎西町より南埼玉郡全域を含む八潮市迄の細長い狭狭な地域である。

武蔵国の東部で、足立郡と葛飾郡とに挟まれた南から北西に細長い地域である。西側の境は、元荒川の上流、騎西町より・菖蒲町下栢間より分岐下流は、綾瀬川を境として東京都迄足立郡に接する。

東側の境は、上流は、騎西町より旧利根川河道（現水田地帯）を岩槻に至り、旧隅田川（現会の川）と元荒川合流点より下流は元荒川を境とし、北葛飾郡と接する。

岩槻市より元荒川を吉川橋に至り、その下流は中川と名前が変り、八潮市潮止橋に至り、中川から分岐して旧中川を葛飾区奥戸に至り、綾瀬川との合流点に至る、以上の川を境として、東側が南・北葛飾郡と接する。

註、1、天慶の乱の後、平良文の子忠頼が武蔵押領使となり、以後代々武蔵国を支配し、その子孫が分派し各地に播擧して、中世武士団を形成して行く。

2、「私市党」は、武蔵七党に数える書もあるが、乱後武蔵に押領使として野与党が進出するに及び、北部に後退して、忍・熊谷地域に、其の後裔と云える氏族を見る事が出来、その名を留めている。

3、「私市」と名乗る一族は、東京五日市市附近に、其の末裔と思える名を見る事が出来る。

野与党系図には、騎西町の内・道智・道後・多賀谷・多名（種足）・高柳等の地名を苗字に冠した人々の名が出て来る。

これ等の人々の事跡に付いては、吾妻鑑に多くの名前が記され、他地区と比較して、鎌倉期の在地武士達の活躍と動勢を窺い知る事が出来る事は幸いで有る。

騎西地区の野与党諸氏は、野与六郎胤宗　― 太郎元宗　― 野与六郎基永　― 太郎恒永の系からの分派である。北埼玉郡南部の内、旧利根川河道以南（現騎西町）地

域に分派し播擲した一族が、初期の野与党である。

「野与恒永」奥州の役(後三年の役)にて戦死、子無き為、千葉宗家より、千葉氏二代下総権守常長武蔵押領使の子、「十郎行長号龍大夫」が野与の地に着任、大蔵大夫を称し、野与党の束ねと成り、子孫が騎西郡一帯に分派、之等を束ねたのが後期の野与党である。

初期の野与一族の拠点には、

因に、初期の野与一族の拠点は、野与(現白岡町野牛)・大蔵「野与恒永」の舎弟「二郎恒宗」は大蔵二郎を称す(現葛蒲町三箇大蔵)・道智(現騎西町道地)・多賀谷(現騎西町内多ヶ谷)・多名(現騎西町中種足)・鬼窪(現白岡町篠津)・萱間(現葛蒲町栢間)・高柳(現騎西町上高柳)・笠原(鴻巣市笠原)・道後(拠点不明だが鴻巣市郷地?)等である。

註、葛蒲三箇村大蔵 新編武蔵風土記稿には、「三村合併したにより三箇村と名付く」と有る。

後期の野与党一族の拠点には、

1、大蔵新大夫行長(葛蒲町三箇大蔵)よりの分派、
Ⅱ 洪江(岩槻市洪江町)・利生又高柳(騎西町高柳)・南鬼窪(白岡町興善寺付近)・白岡(白岡町丸城)・黒浜(白岡町黒浜)・江ヶ崎(白岡町江ヶ崎)・佐那賀谷(白岡町実ヶ谷)・西脇(不明)等がある。

註、大蔵新大夫行長号利生大夫(又は龍)初期入居時は、現葛蒲町三箇大蔵(現葛蒲町に大蔵の地名残る)に、後岩槻市箕輪に移り、箕勾氏を称す。

2、箕勾氏よりの分派には、

Ⅱ 大相模(現越谷市相模町)・須久毛(現岩槻市笹久保)・横根(岩槻市横根)・柏崎(岩槻市柏崎)・神倉(現岩槻市加倉)・古志賀谷(現越谷市越ヶ谷)等がある。

3、洪江氏よりの分派には、

Ⅱ 八条洪江(現八潮市八条)・洪江(岩槻市村園?)・金重(岩槻市金重)・野崎(越谷市野島?)がある。

*、利生又高柳氏は、行長以後の分派である。

Ⅱ 系図上では後期野与党に属すが、詳細は不明。

*、戸崎氏(騎西町史では騎西町戸崎に想定する)野与党系図上には見当たらない。

*、葛浜氏Ⅱ騎西町史では上崎・下崎を含めるが、大河戸氏の分派で、葛浜氏の本貫地は旧利根川の対岸羽生領・賀須市側上下川崎であろうか。

*、道後氏は、道智頼意の三子で、建久元年十一月入洛の行列の後陣随兵四十四番に道後小次郎の名見えるも、(鴻巣市郷地か?笠原・郷地共に元荒川の東岸で騎西郡)拠点は詳ならず。

騎西町 (きさいまち)

騎西町は、県東部水田地帯の一面に在り、埼玉古墳群の地に近く、早くから開発されていた事が推測される。

中世には武蔵七党の一、「私市党」(キサイ又はシノ)の根拠地となった町であるが、戦乱に因り「野与党」の支配となり、「私市党」は衰えて、忍・熊谷方面にその勢力を留め、騎西町には、「私市城」と書く城名を残す城跡を留めている。

騎西町には、約二百二十基の板碑がある。その内約百基は、鎌倉時代のもので、地域的に密集している。

騎西町内で最古のものは、騎西町内にある善応寺の仁治三年(一二四二)年銘のもので、最大のもは、根古屋金剛院の線刻三尊来迎図板碑で高さ365cm、幅133cm、厚18cmある。

註、1、騎西町史や埼玉の歴史等には、「騎西町は私市党の本拠地であった」、とのみ書かれ、其の後の入部者「野与党」の事が記されて無いが、板碑の年記銘によれば、野与党一族が入部して居た事は明らかであるが、野与党系図には、「騎西」の地名を苗字とした「騎西氏若しくは私市氏」と云う名が見出せない。

2、葛浜氏は、騎西町史には、上・下崎を含め想定するが、大河戸氏からの分派で、葛浜は、旧利根川の対岸羽生領が本貫の地であるので羽生領上・下川崎の事であろうか。

3、初期高柳氏は、野与党系図には、野与基永の弟に行忠・高柳と見える。

吾妻鑑に、行忠・高柳四郎とある。

吾妻鑑卷四十一、高柳四郎三郎行忠

吾妻鑑卷四十一、時頼放光佛像供養為、建長

三年正月廿日、將軍家行列、後陣隨兵中に高柳四郎三郎行忠見ゆ。

4、後期高柳氏は、野与基永―大蔵経長―経遠・洪江の弟に、弘経・利生五郎大夫・又高柳とある。「姓氏家系大辞典」には、桓武平氏野与党、武蔵の豪族にして、七党系図に「野与基永―経長―弘経・利生五郎大夫又高柳」と見える。

道智氏

道智氏の拠点は、騎西町大字道智中屋敷・稲荷宮と成就院付近と推測出来る。

道智氏の拠点は、下流の高柳氏の拠点と共に、北東に利根川の旧河道が在り、利根川の自然堤防上に位置し、後背地は耕地や住居に適する地形を備えている。

道智氏の居住した痕跡は、稲荷神社・成就院がある。
 中屋敷・表屋敷・裏屋敷、鍛冶屋敷と称する所あり、成就院には、鎌倉前期の寛元二（一二四四）年二月・鎌倉中期の弘長三（一二六三）年六月日・□安（摩滅）（一二八八？）年期銘の板碑を見る事が出来る。

又、中屋敷の馬橋昌作氏（平成三年八十五才）宅地内に、弘安十八（一二八七）時正、大日・変形五輪塔刻のの板碑・及び嘉暦二（一三三二）年八月廿四日記銘板碑を蔵している。

道智氏の活躍に付いて、吾妻鑑には、

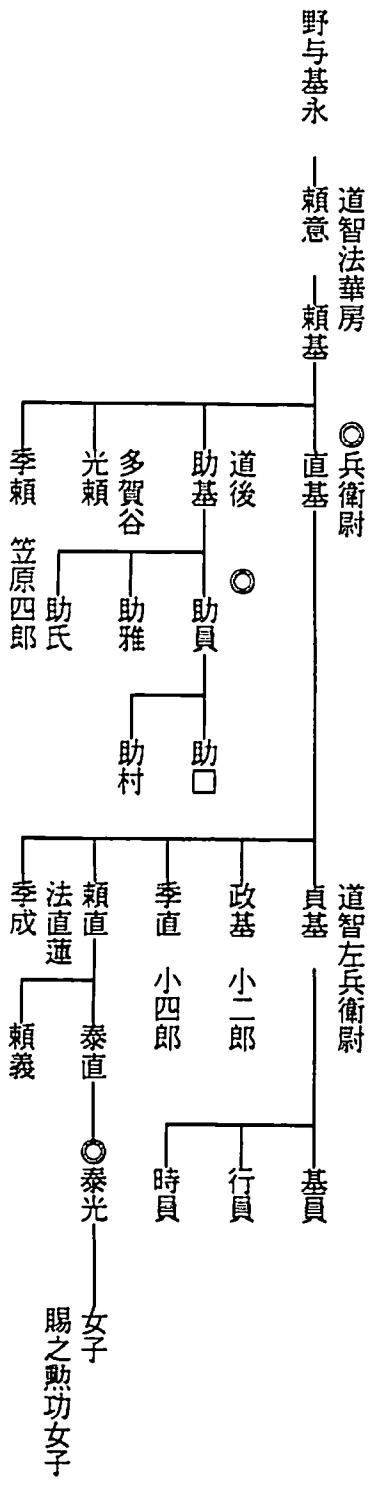
◎ 建久元（一一九〇）年十一月七日、頼朝入洛の随兵の中に、四十四番に道智次郎の名見える。

◎ 道智三郎太郎（助員？） 宇治橋合戦の時、承久三（一二二二）年六月十四日、討死している。

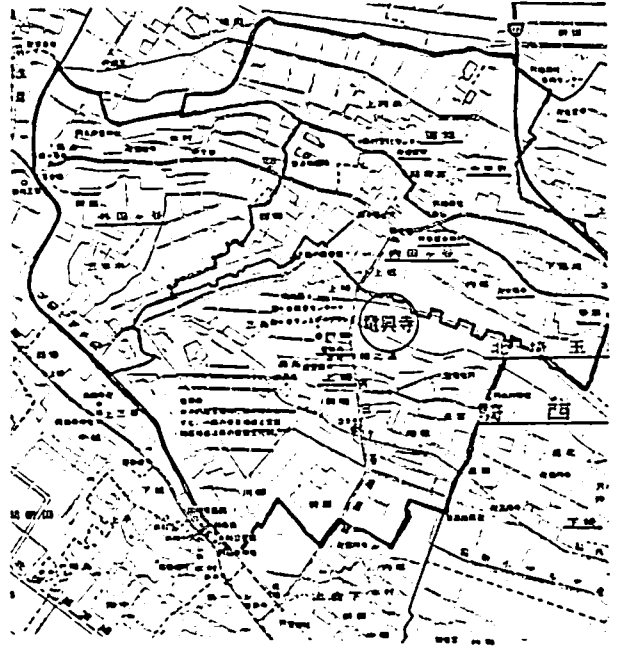
◎ 道智小六郎泰光 正応六（一二九三）年四月廿二日、平左衛門頼綱入道景円が謀反し、其の討手として鎌倉経師谷に於て討死している。

武蔵七党系図には、
 ◎ 道智法華房頼意と其の系の名に、道後（不明）・多賀谷（内多賀谷）・笠原（鴻巣市笠原）・道後氏（鴻巣市郷地）の名見える。

註、笠原Ⅱ和名抄に武蔵国埼玉郷と載す。郷地・笠原は共に埼玉郷である。



道地村 新編武蔵風土記稿



道地・田ヶ谷地区域図

道地村は、太田庄に属す。江戸より行程十五里、東鑑に道智次郎、同三郎太郎承久三(一一二二)年六月十四日宇治川合戦に於て討死と載せたるは、当村に住せし人によ、又遠藤氏の系図にも道智二郎と云う名見ゆ、当国七党系図に道智法花坊とあり、此の法花坊は当所に住せしものなるべし。

小名 中内手・中屋敷・稲荷耕地・下道地・新田

成就院は、新義真言宗智山派、正能村龍花院末寺、稲荷山万福寺と号す。

本尊大日を安ず、中興開山は深宵寂年を伝えず。



成就院の板碑群



稲荷山成就院の全景



成就院・弘長三年板碑

道地地区の板碑

成就院

中内手

寛元二	一一四四	年二月	110cm	主尊月輪
弘長三	一一六三	年六月	150cm	光照偏照
○安○	○年	弘安十一年?	113cm	

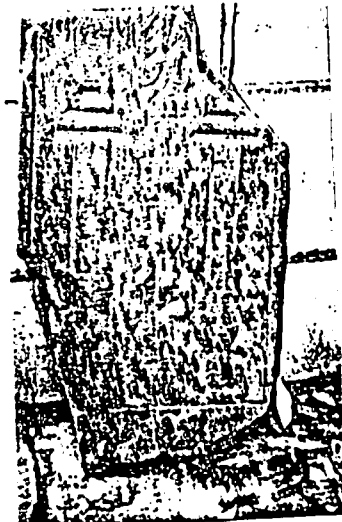
馬橋昌作氏宅

中屋敷

弘安	十年	一一八七		大日	上・下欠
嘉曆	二年	一三二七	八月廿四日	大日	上・下欠



道地稲荷神社



馬橋昌作氏宅板碑
弘安十年



馬橋昌作氏宅塔
線刻五輪

大福寺は、多賀谷氏館跡也。多賀谷氏は、建久嘉吉(一一九〇〜一四四三)迄の二百五十年間在住し、常陸下妻城に移る。

内田ケ谷郷は、海上郷山根庄に属す。古は西庄田ケ谷村と唱へ、多賀谷氏住せしと云う。

多賀谷氏按ずるに、武蔵国埼玉郡多賀谷郷の住人、左衛門尉家政は、金子十郎家忠が二男なり、曆仁元(一二三八)年、頼経の髓兵たり、其の子弥五郎重茂は頼嗣に仕へ、建長三(一二五一)弓初めを勤め、其の子五郎景茂、宗尊親王に仕へ、康元元(一二五六)年、弓初めに景茂、其の器に撰れ、其の子彦太郎家経、其の子五郎政忠、其の子彦太郎家茂相續す。

其の子弥五郎政朝、下総国結城左衛門尉満広の子、源五郎光義を鯨となし、家を継がしむ、光義、古郷忘れ難く、結城へ帰りしかば、嫡子彦四郎氏家を始め、家臣随ひ来ると載たれば、この頃迄、当所に住せしなるべし。

大福寺の寺伝に、

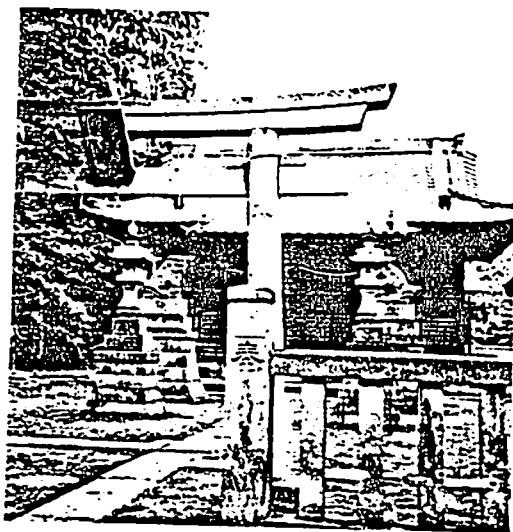
「多賀谷氏下妻へ移し時、館跡へ建立」と云う事見えたと、同記に據れば、「彦四郎氏家一旦常陸へ赴き、後寛正(一四六〇〜六五)年中下妻城取立之に住」とあれば、寺伝に「此処より下妻へ移」と云は誤なり、尚その寺の条下に辯ぜる、家政重茂等が事は東鑑に載せる所も、多賀谷記と符合せり。

又、当国七党系図野与党に、道智法花坊、多賀谷二郎光基、多賀谷弥三郎某、多賀谷三郎重基、多賀谷四郎久基等云う人見ゆ。

道地村と云は、隣村なれば、是等の人々も当地に住せし事知るべし。

又、外田ケ谷村名主太四郎の先祖は、多賀谷氏に仕えし者也、其の家伝に多賀谷氏の先は、頼朝に仕えて、安芸国 藻刈城を賜り、遥の後宮内小輔武重が時、毛利氏に仕ふと云のみにて其の詳なる事を知らず。

当村、元は内外の分ち無かりしが、騎西領本圃の堤を築し時、堤の内を内田ケ谷と云う、堤の外を牛之助新田と云しが、後は外田ケ谷と唱へ二村に分てりとぞ。



多賀谷氏の拠点多賀谷神社

此所は正保の頃は、松平伊豆守が領分にて、元禄九年正木甚五兵衛・会田小左衛門に給はり、残れる地は、御料なりしが、後小笠原五左衛門・久世忠左衛門に給りて、今は正木左近・会田伊右衛門と久世小笠原等知行せり。

大福寺 新義真言宗 熊野山弥陀院

正能村龍花院末、当寺は、多賀谷某下総国下妻へ移りし時、居住の跡へ建立する所也、と云ど、村名の条にも弁せし如くなれば、多賀谷光義当所を去つて結城へ赴き、其の館跡へ当寺を建立せる成り。本尊 弥陀を安ず。



多賀谷氏館跡大福寺全景

多賀谷氏の活躍 吾妻鑑

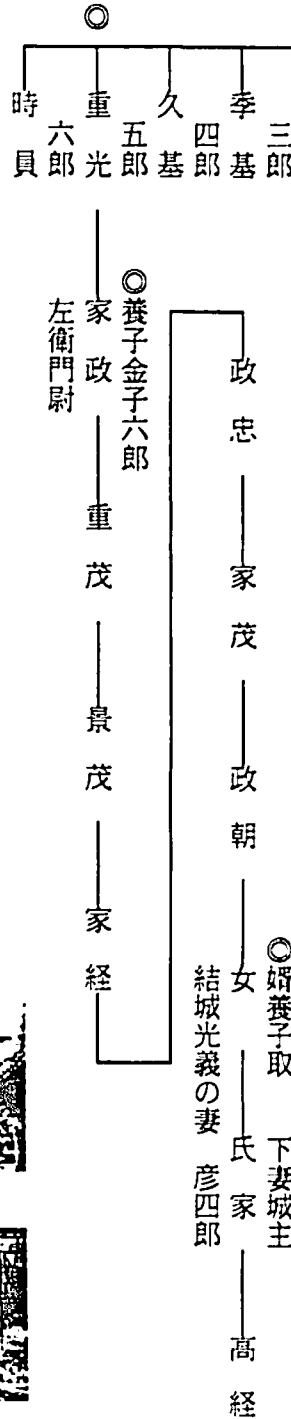
- ◎ 建久元年(一一九〇)十一月七日、頼朝入洛の刻 随兵の中に、先陣 九番 多賀谷小三郎
- ◎ 嘉禎四年(一二三八)二月、藤原頼経入洛の刻 随兵の中に、廿一番 多賀谷太郎兵衛尉
- ◎ 廿六番 多賀谷右衛門尉(金子家政?)
- ◎ 嘉禎四年(一二三八)六月廿日、関東御教書 寄合、多賀江兵衛尉随分限毎年可致沙汰也、云々、 たがへの二郎入道殿、(多賀谷)
- ◎ 仁治二年(一二四二)十二月、武蔵野開墾奉行に 多摩川を掘通し、水田を開く奉行 多賀谷兵衛尉
- ◎ 建長三年(一二五一)正月、弓始の射手に撰れ 三番 多賀谷弥五郎重茂
- ◎ 建長四年(一二五二)正月、弓始の射手の撰を止められる。依不有可然射手 多賀谷五郎景茂
- ◎ 建長五年(一二五三)正月、弓始の射手に撰ばる 將軍簾中御覽 五番 多賀谷弥五郎(重茂)
- ◎ 同、九日、前浜にて御的の射手に 十人の中に 多賀谷弥五郎(重茂)
- ◎ 建長六年(一二五四)正月、弓始の射手に 五番 多賀谷弥五郎重茂
- ◎ 建長八年(一二五六)正月、弓始の射手に 五番 多賀谷弥五郎重茂
- ◎ 正嘉二年(一二五八)正月、弓始の射手に撰ばる 十五日、射手十人の中 五番 多賀谷弥五郎重茂
- ◎ 嘉暦三年(一二三八)五月、的始の射手を務める 九日、三番 多賀谷弥平治光忠(景茂の孫?)
- ◎ 康永元年(一二四二)十二月、足利尊氏、天竜寺 参詣供奉人に、多賀谷平二光忠見える。

多賀賀公氏

野与六郎 道智法華房 平太 多賀谷二郎
 基永 頼意 頼基 光基

弥二郎(光村)

乙鶴丸八郎 江戶郷柴崎・武蔵国南島田内在家・筑後国瀬高庄内小犬丸名田併て
 *重政 中屋敷・伊予国周敷北条地頭得分内(佐賀文書纂)より補入
 蓮光



田ヶ谷地区の板碑

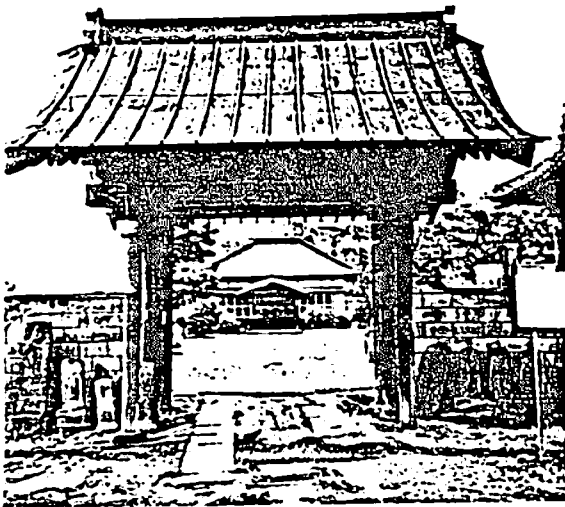
大福寺 真言宗智山派 内田ヶ谷

文永 四年	一二六七	日	上下欠入道交名
文永 七年	一二七〇	日	阿閃
弘口 十一年	一二八八	十一月廿日	上下欠主尊特殊
延慶 四年	一三一一	二月十一日	上欠
延文 二年	一三五七	十二月	上欠光明妙安禪尼

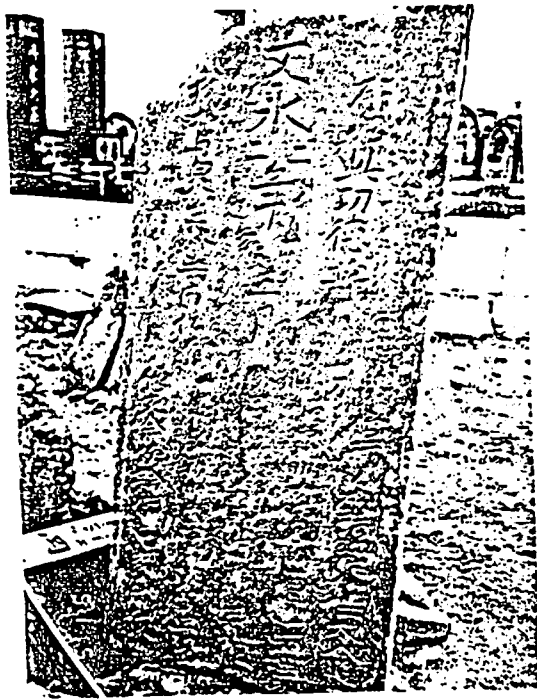
摩滅略完

下欠
 下欠
 下欠
 下欠
 破片

丸に大日
 丸に阿弥陀
 丸に阿弥陀



大福寺門前の板碑



大福寺・文永四年板碑

宝性寺 真言宗智山派 外田ヶ谷
 摩滅上欠 阿弥陀偈二行書
 破片 阿弥陀
 破片 阿弥陀
 上欠 光明真禪尼為逆修
 上欠 十二日 光明
 八日

上崎地区

上崎村

新編武蔵風土記稿

上崎村は、山根庄に属す。江戸への里数検地等前村に同じ、古は上崎・下崎一村なりと云えど、龍興寺義氏の寄進状に上崎村とあれば、分村せしも古き事なるべし。東西十七町、南北十五町、用水は、新川より引沃く。

当村も、松平伊豆守領分なりしを、松平右近将監と匹田某に替へ賜り、残れる地は御料なりしが、後安藤某と松平大和守に賜りて、今は、松平右近将監・松平大和守・安藤弾正少弼・匹田小太郎が知行せり。

小名 西原 相ノ原 三重掘 上壺 長宮 三島

三島社 雷電社 天神社 龍興寺 虚空蔵堂 稲荷社
 天神社 宝蔵寺 養泉寺 薬師寺 不動堂

龍興寺

禅宗 臨濟派相模国鎌倉円覚寺末 大光山と号す、

延宝六年住僧大澄が書しものに大同元年天祐草創の地なりとあれど、上りたる世の事なれば如何共云難し。

中興開山曇芳は永享八年九月七日寂せり、此の僧は、鎌倉管領持氏の叔父なりしと云伝ふ。

本尊釈迦毘首、羯寧の作座像にして、長サ七寸五分、



龍興寺・青石卒塔婆

又、持氏・春王・安王の墓三基建てり。

持氏 法名 長春院陽山継公

永享十一年二月十日、春王は、花山院春岳香公
嘉吉 元年四月 日、安王は、太山院天岳雲公

と彫りたる由、今は、文字も滅して、其の様古きもの
には、論なかるべし。

足利治乱記を聞するに、永享年中、持氏京都に叛き、
相州早川尻の戦に討負け、永安寺に入り自害す。
幼子春王・安王は、下野国結城が許に逃れ、日光山に
隠れ居あるが捕はれとなり、京へ送られける塗中美濃国
垂井の金蓮寺にて自害し、骸は高野山へ送ると見たり。
又、鎌倉九代記には、金蓮寺に葬し由載す。

今按に、当寺古河公方政氏・義氏寄付の文書も載すれ
ば、成氏の時、父供養の為に墓なるべし。
其の文書左の如し。

大光山龍興寺之事長春院殿御牌所の懸有之而勤
行無退転儀專要候仍寺領等如前々不可相違候
恐々謹言
七月三日

材室良西堂

政氏 花押

大光山龍興寺之事御寺併有之勤行等無怠転專一
候寺領之儀如前々上崎村不可有之相違候
恐々謹言
二月十日

虎溪隆和尚

義氏 花押

上崎地区板碑

竜興寺 臨濟宗円覚寺派 上崎

文永 二年 一二六五 六月 日 欠蓮台下部線刻
文永 八年 一二七一 二月 日 欠 青石卒塔婆

文安 四年 一四四七 正 廿五日 光明善双慶公禅門

下欠 光明棹線外弥陀
破片欠 光明 弥陀
摩滅略完 弥陀

騎西町市場

新編武蔵風土記稿

騎西町場は、羽生・忍辺より、岩槻・菖蒲辺へ往来の馬次也、江戸より行程十二里、山根庄に属す。

土地沿革の説甚多し、土人説く所により按ずるに、此の辺郡の西にあるを以て騎西と号せしならん。

当国七党に私市党あり、此の辺に住せし故、在名を以て党に名付けしならん。

私市と書く事其の故を知らずと云ども、此の地、久く繁盛の地故、私に市を立し事等有りて私市の字を用ひ唱は、旧によりてキサイト号しか。

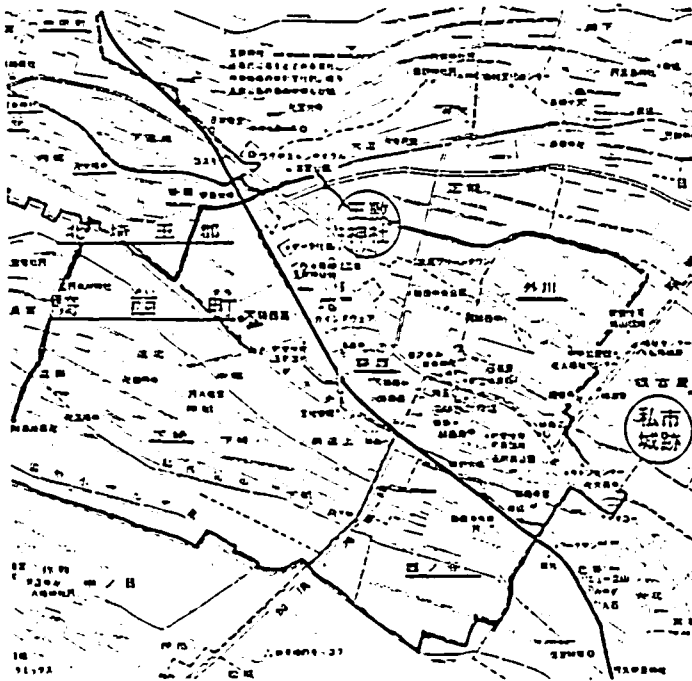
其の後、此の地に城壁築し頃、武士屋敷の集りし所、根小屋と呼び、市店の並べる所を騎西町と唱しとなり。此処に於て、自ら二村になりしと見えて、正保の改には、騎西町根小屋の二村を載せて、場の字をば加へず、元禄の図には、今の如く騎西町場と記す、尚領名と併せて見るべし。

東西十四町、南北四町、其内、東より西に貫て七町余人家軒を並べ旅籠亭市店略備はりて、毎月四九市、四六次中市をなせり。

人馬の継立ては、此処より久喜町へ三里、鷺宮村へ二里、加須村へ一里、羽生町場へ二里半、菖蒲町へ一里余行田町へ三里、新郷へ三里、鴻巣宿へ二里半、桶川へ四里、栗橋へ四里の行程を継送り。

小名 牢屋舗 新田町 元町 中上町 中町
下中町 新川

久伊豆神社 ・ 末社 宮目神社 ・ 伊勢宮 ・ 伊勢下
宮 ・ 八幡香取 ・ 稻荷松尾 ・ 三峰 ・ 五光権現
・ 牛頭天王 ・ 弁天 ・ 元宮 ・ 伊豆権現 ・ 第六天
社
大英寺 ・ 釈迦堂 ・ 善応寺 ・ 秋葉社 ・ 妙義社
三峰社 ・ 八幡社 ・ 白山社 ・ 浄楽寺 ・ 実乗院
薬師堂 ・ 多門院 等



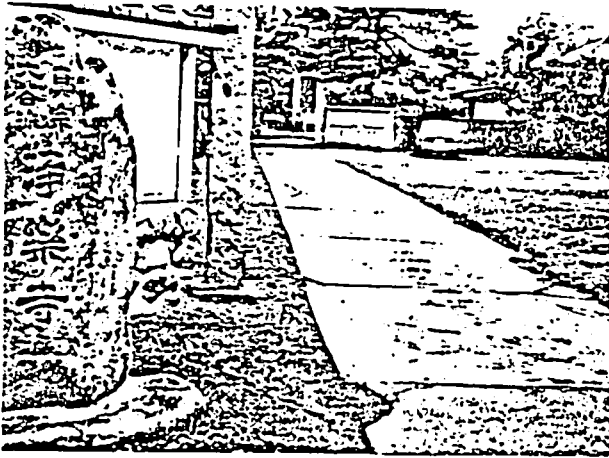
騎西町場地区図

浄楽寺 一向宗 真宗大谷派 騎匹

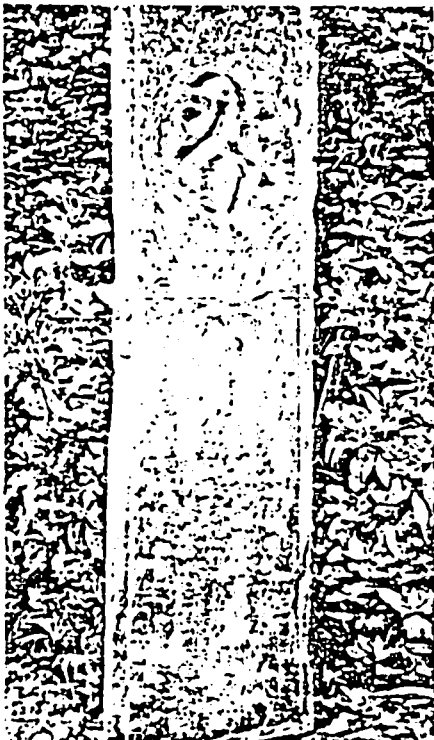
京都東本願寺の末、開山浄楽、元龜三年五月朔日示
 寂と云ど、之は当寺未だ庵室なりし頃の僧なるべし。
 後大久保相模守忠懸、資財を供して一寺と成せり、是を
 当寺の開基とすと云ふ。

鍾楼 鐘は、延宝六年の銘なり。

下欠 主尊莊嚴 開山・下欠 主尊莊嚴 二世
 元亨二(一三三二)年 金剛界大日・延文二年
 (一三五七)十一月 六日 柄・欠鎌倉期改造
 同寺には、以上の板碑を蔵す。



浄楽寺の全景



善応寺・仁治二年板碑



浄楽寺・元亨二年板碑

善
 応
 寺

善 応 寺 禅宗曹洞派 号愛宕山 騎西

上会下村雲祥寺の末、愛宕山と号す。開山闇室秀大寛
永三年三月廿六日示寂、本尊十一面観音を安す。

仁治三(一二四二)年十二月日 記銘の、245cm
騎西町最古の板碑を蔵す。

実 乗 院 新義真言宗 号大龍山 騎西

根古屋村金剛院の末、開山弘源、慶長十年七月七日示
寂、本尊十一面観音也。

文保二(一三一九)年二月時正(春彼岸)種子弥陀
欠 年己未 八月彼岸(鎌倉期)の板碑を蔵す。



実乗院・文保三年板碑

大 英 寺 浄土宗崇亀山松応院 騎西町

大英寺は、加倉村浄国寺の末、当寺は、天正十八
年松平周防守根古屋城を賜ひ、居城せし頃、寺領三
十石を寄付して建立し、團蓮社満誉玄道を以て開山
とせり。

玄道移転の後、本山第二世無月は兼ねてより、周
防守深く帰依し僧なれば、当寺へ請待して二世とな
し、当寺五十石の内二十石を加増し、後周防守常陸
国笠間へ移りし時、其処へも一寺を草創し、彼無月
を以て開山と成し、当寺五十石の処二十石を分けて
寄付せり。

無月は、寛永三年十月廿九日、示寂せり。

後周防守聞え上げて、同十九年三十石の地を御朱
印に願ひ替へしと云ふ。
本尊弥陀は、恵心の作、当寺に小田原北条よりの奇
進状と云ものあり、其の状に、

御所陣建立寺家彼敷地之事、

松郷之内、 一町二段、
寺井郷之内、 六段、
合 老町八段、

分錢 二百貫七百文之所
永代令寄付候、

自然河越用所之時、寺家相応之
儀可被走廻状、如件、

弘治二年四月

晦日

判
明 運 舎

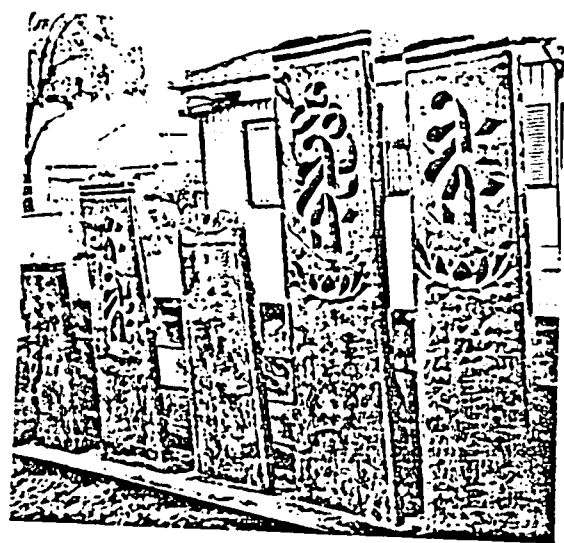
按に、弘治は、当寺未だ聞ざる前の年号にして、明運社と云は、当寺之僧なりと云も伝へず、文中松郷寺并郷の名は、入間郡内の地名なれば、恐らく彼寺院の内に伝るものならん、当寺に伝はる所以は詳ならず。

鐘 楼 鐘は、寛延二（一七四九）年の銘有り。

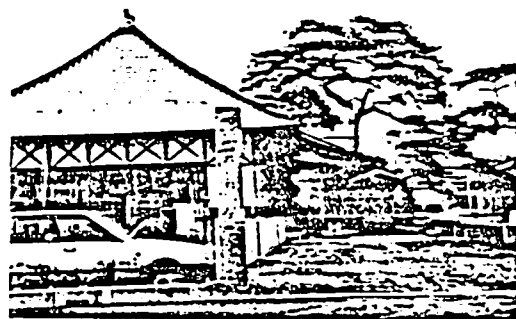
註、大英寺の起立は、前々よりの寺跡に建立されたもので、大英寺の前身の寺は、北条氏からの文書から察するに、川越城攻略の上で重要な寺で在った事が察せられる。

特に私市城の攻防の歴史は、至近に在る此の寺にも、興亡に関する重大な影響が有った事が窺える。

鎌倉期の大英寺の前々身は不明であるが、当大英寺の境内に、多数の鎌倉期よりの板碑を蔵す事は、之等の板碑の年記銘の時代には、この地域の有力支配者の居住地で在った何よりの証であるが、残念乍ら、詳な事は不明である。



大英寺の板碑群



大英寺の全景

騎西町場地区の板碑

浄楽寺 真言宗大谷派 騎西

大英寺 浄土宗 騎西

正嘉元年 一二五七 四月十二日 線刻三尊来迎図

文永十二年 一二七五 光明 偈5

弘安元年 一二七八 十一月 日 三尊 欠

弘安九年 一二八六 二月 日 釈迦・弥陀 主尊莊嚴

嘉元元年 一三〇三 十一月廿九日 光明嘉曆二改刻 名号阿弥陀下欠

延暦二年 一三二七 胎蔵界大目下欠

善応寺 曹洞宗 騎西

仁治三年 一二四二 十二月 日 騎西町最古

実乗院 真言宗智山派 騎西

文保三年 一三一九 二月 時正 光明 春彼岸
己未年 八月彼岸 柄

奠師堂 騎西

下欠・左欠 十 大日
上・下欠 大日・釈迦

下欠 主尊莊嚴開山
下欠 主尊莊嚴二世
元亨二年 一三三二 金剛界大日

延文二年 一三五七 十一月 六日 柄

欠 鎌倉期 改造

西円寺 真言宗智山派 下崎

建長 摩滅 一二四九〜五六 四行 摩滅

弘安十一年 一二八八 二月 彼岸第六番造立

延慶四年 一三一〇 二月十六日 主尊莊嚴

応安五年 一三七二 正十八日 光明主尊釈迦

下欠 弥陀
上欠 鎌倉期?

正福寺 曹洞宗 下崎

文永八年 一二七一 五月 日 蓮台下部線刻

上下欠 弥陀・釈迦
上下欠 弥陀・釈迦

鴻 笠 池 区

野与党系図の内、この地域に拠点を持つ者の氏名には、判然としないが、私市城祉が在り、騎西町最大の板碑が金剛院に有り、付近の寺院や、民家等にも多数の板碑が見られるので、有力な同族の居住を認める事が出来る。

根 古 屋

新編武蔵風土記稿

根古屋村は、江戸より行程十二里、庄名・及検地の年代・領主の遷替え等総て騎西町場と同じ、此の地昔は、騎西郷の内なり、別れて二村とせし年代は知らざれど、正保の図には己に二村とす。

当時私市城の根古屋の地なれば、村名にも呼ぶと云、其の城は、太田道灌の造営なり、詳なる事は、城跡の条に出せり、民戸三十四、東は牛重（うしかさね）村、西は外川村、南は騎西町場・鴻笠の二村北は日出安村なり、東西へ五町、南北六町余、用水は新川を引用ゆ。

小名 足軽町、昔城主有し頃足軽等住せし地なるべしと云、

城耕地、古城跡の廻りを云、

石阿弥陀耕地、高さ一丈余、幅四尺余の板碑在り、三尊の弥陀を彫れり、弘法大師爪を以て彫刻有りしとて、爪の赤陀と云、この碑有るを以て起りし名なるべし、

沼 田、古城有し頃の、構の沼の跡と云、

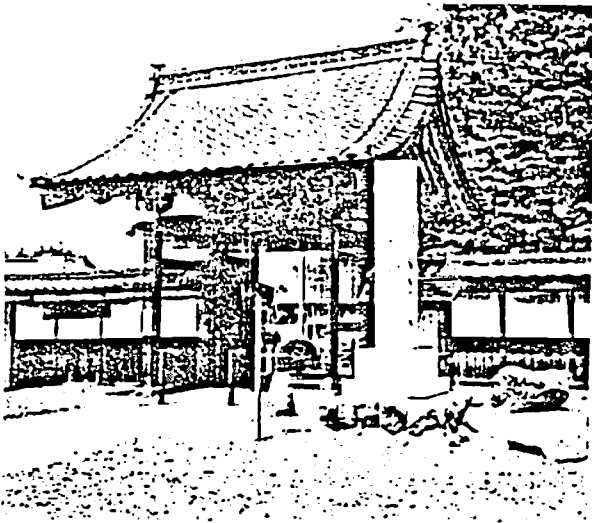
代官町、中宿・樹木畑・方原・つき道・新田等の小名有り。

金 剛 院 新義真言宗 号神光山大日寺

当寺は、山城国醍醐報恩寺の末山なり、慶安年中寺領二十五石の御朱印を賜はれり、

当寺は、私市城築営の頃、日出安村より引移りと、されど当寺に所蔵せる古器蓋の裏に、文禄五年住僧私源の時引移せしと有るは、城築営の後の事ならん、

私源は、騎西町場美乘院の開山にして、慶長十年七月七日寂せり。



根小屋・金剛院全景

線刻来迎三尊画像板碑

根古屋村金剛院

騎西町最大の板碑 高サ 365m 幅133m

阿弥陀・観音菩薩・弥勒菩薩の三尊を見事な線刻で、描あるもので、騎西町の貴重な文化財の一つである、残念ながら線刻画像が、永年の風雪の為に見え憎くなつてしまひ、光線の加減で微かに見え、主尊は、正面を向くが、画像は、大英寺板碑に酷似している。
年紀銘は、摩滅していて不明であるが、大英寺板碑とはほぼ同時代のものと考えて良いであろう。

本板碑には、基部に内経32cm x 18cm 楕円形の孔が貫通して居るのが特長である、他に例を見ないが、倒れるのを防ぐ横木を通した孔と見られる。

巨大な板碑で、来迎画像板碑では日本一である。

幸な事に、騎西町場 大英寺に小型ながら同形の線刻画像を見る事が出来、御参考に供する事が出来る。

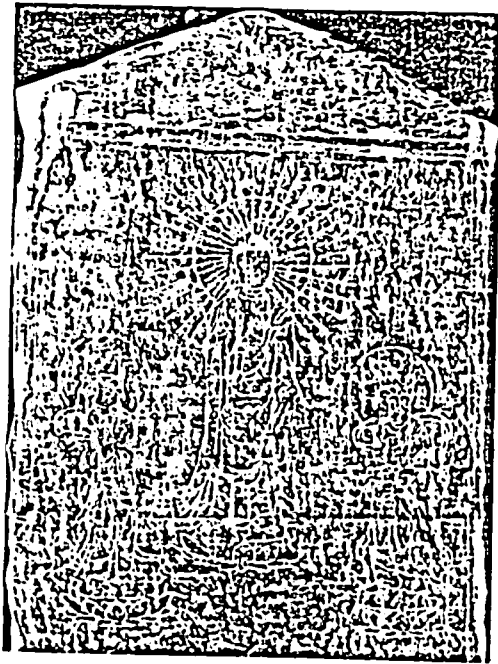
大英寺 Ⅱ頂部少し欠け、高サ118m 上幅34m

三尊はそれぞれ飛雲に踏割り蓮台の上に乗り左から右下に向う様子を示す。

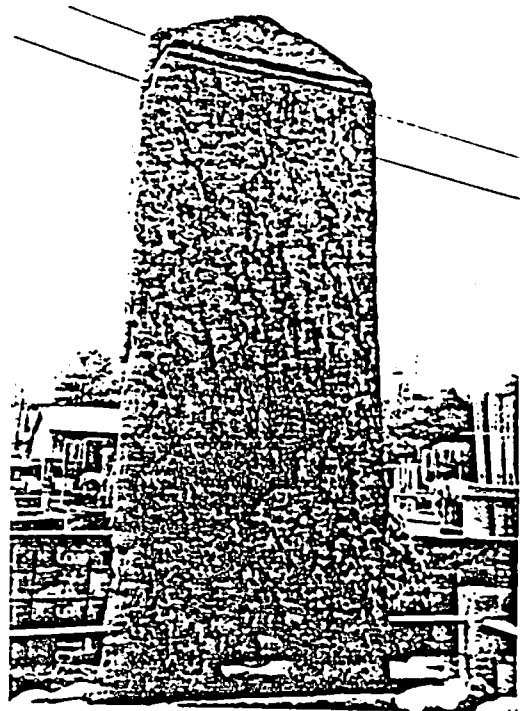
金剛台をもつ観音は腰を下げ前屈みである。

三尊はそれぞれ頭光持ち、阿弥陀には吹寄せ光り背、白毫から二条の光が発し、棒は、唐草模様である。

正嘉元年大歳丁巳四月十一日 年紀銘



大英寺・来迎画像碑・拡大



金剛院・線刻来迎画像板碑

廃せし年代詳ならず、されど騎西町場村民所蔵せし城壁の図有り、之寛永年中松平伊豆守領せし時のものなるよし、其の家人の姓名等を記したれば、この頃迄も城壁の存せし事知らる、

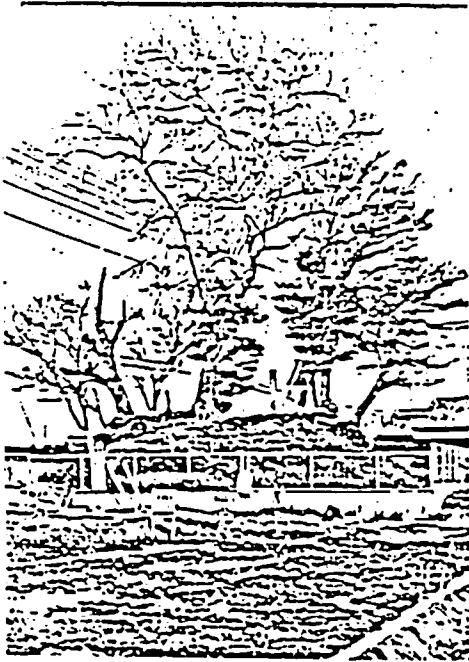
古くは、騎西山の根城共、土人又根古屋城共云、私市と云う事は騎西町場に弁せり。

本丸・二ノ丸・三ノ丸・厩及鉄炮場等、今は竹林及雑木生茂れる地となれり、本丸は廻り九十間余、本丸・二ノ丸其の外在所々巡りに土手の蹟残り、大手口ありし所は、東に向へる様にして、之の外城の廻り沼なりし所、今は大路水田と成れり。

土人所蔵せる旧記に、山根城は、太田道灌築き、城主本間弥九郎・夫より小田大炊助・小田助三郎居城たりしと、

又「甲陽軍鑑」に云、永祿五年三月上杉輝虎、成田長康が次男小田助三郎頼興が籠りし私市城へ押寄せ、一日一夜攻戦ふ、城中僅か五十騎ばかり、終に打負て助三郎自害し、則城をも焼払と云々、

初輝虎城外を巡見し、廊下橋の間より婦人の影の移るを見て、人質曲輪なる事を知り、沼を埋め無体に攻破りしと云、



私市城・物見台跡



複元した私市城天主閣

「小田原北条記」に載する處は、小田・降を請とあり、何れが正しきを得たりしや知不、

且つ助三郎を「廃城考」に伊賀守と記す、助三郎の初の名なるべし、

御入国の初松平周防守康重、武州騎西に於て二万石を賜ふと、其の家の譜に見えたるは此處の事也、之の後領主の遷替は騎西町場の条に弁せり。

註、「甲陽軍鑑」は、「上杉輝虎強攻めで落城、城主小田助三郎城を焼払い自害す」、「小田原北条記」には、「城主小田助三郎、降るを請う」とあり、落城に関する記述の違いを記したものである。

鴻芝地区の板碑

観音寺 曹洞宗 根古屋

嘉元 二年 一三〇四 二月 光明上下欠

欠 三尊 下欠

欠欠 大日 弥陀心呪

坂庭末吉氏宅 根小屋

元応 元年 一三二九 十月七日 光明上欠

篠塚豊蔵氏宅 根小屋

文亀 三年 一五〇三 十一月廿九日 南無妙法蓮華經

柿沼政義氏宅 根小屋

至徳 元年 一三八四 八月廿八日 大日 口弥陀

上下欠 阿弥陀 右欠

摩波 上欠 上欠二尊

関口清次郎氏宅 牛重

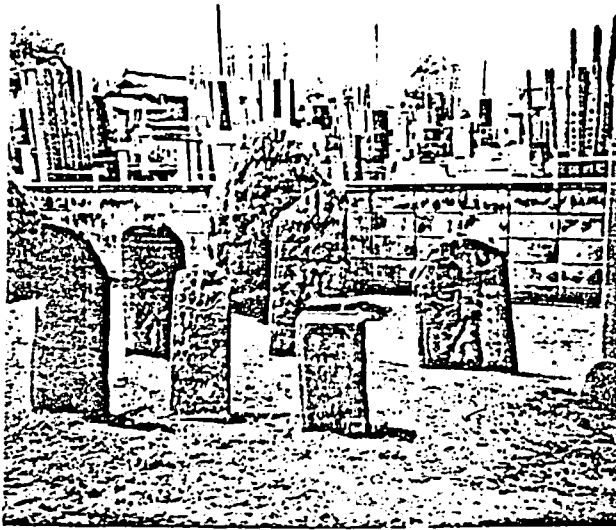
正和 四年 一三一五 四月廿八日 契昌尼命日也



私市城・見台跡板碑

金剛院 真言宗智山派 根古屋

摩滅 觀台六有り
 應長 元年 一三一 二月 日
 摩滅 地上完
 欠 下欠
 摩滅 上欠
 剝離 上欠
 摩滅 上下欠
 應永三十二年一四二五
 三尊來迎區最大
 弥陀南無阿弥陀
 丸に大日
 三尊莊嚴体
 弥陀十仏冬蓮台
 阿弥陀
 弥陀偈文最終例



金剛院・板碑群



私市城址の碑

小野田正二氏宅

康永三年 一三四四 二月十六日 阿弥陀 略完

妙光寺 日蓮宗 牛重

文永六年 一二六九 七月廿八日 偈6主不動明王

万福寺 真言宗智山派 牛重

改造 完 墓石に改造

寿昌寺 曹洞宗

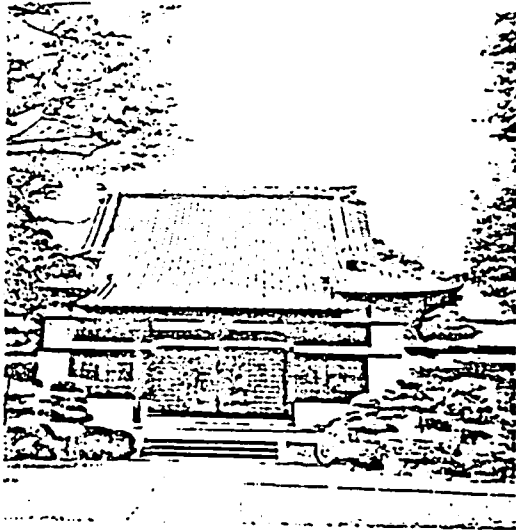
鸿基

医王寺

曹洞宗

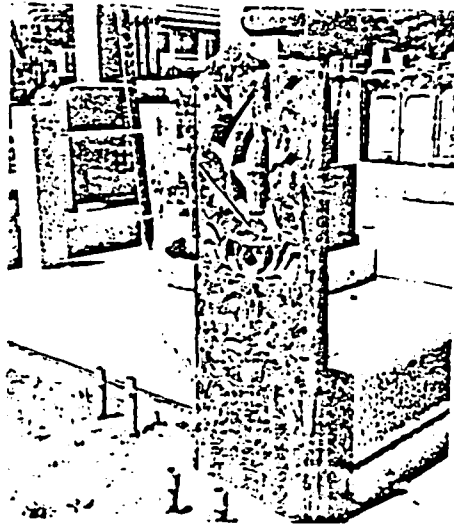
芋基

弘長 四年	一、二六四	三月 日	阿弥陀 摩滅
正応 三年	一、二九〇	卯月	偈10
文保 二年	一、三一八	三月十九日	光明 上欠
觀応 三年		二月廿七日	大日 略完
延文 四年	一、三五九	十一月廿四日	光明 上欠
永和 四年	一、三七八	十月廿二日	阿弥陀 花瓶
応永十四年	一、四〇七	十二月 五日	阿弥陀 略完
応永十五年	一、四〇八		弥陀 道口禅門
応永廿六年	一、四一九	十月 日	弥陀 道永
応永廿九年	一、四二二	十二月 五日	弥陀 了覚禅門
	下欠		弥陀 光明
	下欠		阿弥陀 下欠



寿昌寺 応永廿九年板碑

摩滅	上下欠	塔四方仏多聞天
安元 二年	上下欠	阿弥陀
延久 二年	一、三〇三?	偈10 乾元二?
	卯?	弥陀延慶四年?
摩滅	上下欠	大日二尊欠
		大日 上欠



医王寺・板碑

下戸塚路上

摩滅
永享十二年 一四四〇 十二月 三日
大日 下欠
弥陀道德禅門

以上